

【第89回生涯教育講座】

脳神経血管内治療による脳動脈瘤治療

あき 秋 やま 山 やす 恭 ひこ 彦

キーワード：脳神経血管内治療，脳動脈瘤，未破裂脳動脈瘤，くも膜下出血

要 旨

脳動脈瘤が形成される原因の詳細は不明であるが，その破裂はくも膜下出血をひき起こす。脳ドックなどの検診で，破裂前段階の脳動脈瘤（未破裂動脈瘤）が見つかった場合には，動脈瘤の大きさや形状あるいは家族歴など，将来の破裂に関与しうる要因を評価し，治療におけるリスクとベネフィットも勘案した上で，破裂前段階での治療が勧められる場合がある。治療方法は現在においても開頭手術が第一選択と思われるが，近年新しい治療方法として，脳神経血管内治療による低侵襲治療「コイル塞栓術」が急速に普及しており，脳動脈瘤治療を考える上で非常に重要な治療手段となっている。本稿では，未破裂脳動脈瘤と脳神経血管内治療について述べる。

はじめに

脳神経血管内治療は脳神経外科領域における治療の一手段として，近年急速な進歩を遂げている。治療の対象となる疾患は，脳動脈瘤や脳動静脈奇形などの出血性疾患に対する塞栓術をはじめ，脳梗塞に対する閉塞血管の再開通療法（選択的血栓溶解や機械的血栓除去），脳腫瘍に対する動注化学療法や腫瘍摘出術前栄養血管塞栓術など非常に多岐にわたる。また現在，脳梗塞の原因の約30%を占めるアテローム動脈硬化性狭窄症に対する経皮的血管拡張術については，2008年から頸動脈に

対するステントを用いたバルン血管形成術の保険承認が得られ，治療実施数は切開手術である頸動脈血栓内膜剥離術を凌駕するに至っている。頸動脈ステント留置術については，本誌第27巻3号で概説した。

今回は，脳神経血管内治療の中でも最も代表的とされる，脳動脈瘤に対するコイル塞栓術について述べる。

1. 脳動脈瘤とは？

a) 脳動脈瘤の成因

脳動脈瘤ができる原因は不明であるが，先天的あるいは後天的な要因で，血管の内弾性板が断片化を来し，脳血管壁が脆弱となることで生じるとされる。脳血管は本来，800～1,000 mmHg程

Yasuhiko AKIYAMA

島根大学医学部脳神経外科

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1